

内田樹×小松秀樹

# 医療崩壊の文化論

先月から始まったお二人の対談。  
話題は、文化的背景へと深まっています。

## 第2回 庶民社会の無責任

**小松** 日本の医療がうまくいかない最大の理由は、必要なお金は来ないのに社会の要求が過大なことです。

リアリズムの問題として、どれくらいのお金で、どの程度のサービスが可能か考えていない。それから、社会の中で自分の要求したことは、他の人も要求するんだけど、全員には無理なことがある。だ

ったら自分はどこまで要求してよいものかというのでも考えていない。

医療の場合、たいていの人は問題ないんだけど、ひと握りのわがままな人を受け入れざるを得なくて、その人に、ものすごい労力と時間を取られるんです。うまく調整する仕組みが社会から失われていきます。たぶん教育や行政の困

り具合も似たようなところがあると思います。

**内田** 先生は医療崩壊。私のフィールドでは教育崩壊。どちらも一番大きな問題は市場原理主義だと思っています。惰性の強い社会制度である医療と教育とかは、社会の変化に即応して変わらない方がよい分野だと思います。そういうところに市場が関

### 内田 樹

うちだ・たつる●神戸女学院大学教授。1950年東京都生まれ。東京大学文学部卒。東京都立大助手を経て神戸女学院大へ。専門はフランス現代思想、映画論、武道論。著書極めて多数。07年、『私家版・ユダヤ文化論』(文春新書)で小林秀雄賞を受賞。

人まで出てきています。

**小松** いや、医療は、市場原理で動いてませんよ。お金を払ったからといって良い医療が受けられるようにはなってませんから。一部の人がやろうとしていますが、成功していません。やはり問題なのは、わがままをどこまで言うても許されるか、だと思いますね。

人が人をコントロールするには色々なやり方がある、日本の場合には、戦国時代に生存のためにムラが自然発生して、合議制で構成員たちの生殺与奪の権利を持っていたんだそうです。その暴力性とムラ八分になったら生きていけなかったというのと、かなり強烈な行動の抑制があっ

たと思うのです。それがなくなつて、では何で制御するのか、という方法がうまく見当たらないんです。法律ではよほどひどい人しか制御できません。

**内田** いったい、いつ頃からそんなに患者が声高に権利を主張するようになったんですか。

**小松** 80年代半ばぐらいからですかね。

**内田** 何かきっかけがあったんですか。

**小松** さあ、何でしょう。

### 不満のリストと迷惑のリストの違い

**内田** 社会の中から自発的に改善の動きが出てくるか考えると、すぐには難しいかもしれ

れません。日本は庶民社会なんですよね。市民社会じゃない。

庶民は、聖なる天蓋てんがいというか、堅牢な社会システムがあって、それが抑圧的に機能していることを認識しているわけです。その中で、社会システムの機能の不全に対して文句を言うことが自分たちの仕事だと。それも内臓をえぐるように過激な言葉と語法で、不満のリストを長くしていくことが社会にとって良いことだと思っ

ムを管理して順調に運転していくよう日々気を配っている人たちをどうやってモラルサポートするか、そういった類の配慮を一切しません。一方で市民というのは、

### 小松秀樹

こまつ・ひでき●虎の門病院泌尿器科部長。1949年香川県生まれ。東京大学医学部卒業。同大学病院を含む都内8病院で勤務後、83年に山梨医大助教授、99年から現職。主な著書は『医療崩壊』(朝日新聞社)、『医療の限界』(新潮新書)。

自分たちの仕事を  
社会に文句を言うことと認識。  
それが庶民。(内田)



元々の発生から言うくと、西部劇に出てくるように、開拓者たちが集まってきて、そこから辺を開墾して、たとえば学校が必要だとなったら、建物を建てて東部から教師を呼んでこよう、と。病院だって、自分たちが装置をつくって、医者と呼んでこようという風に、当事者としてお金を出してインフラをつくり運営してきた人たちのことです。自分たちがシステムをつくったという意識のあるのが市民で、そのできあがったシステムに後から生まれてきて、自分たちでシステムを管理したりする当事者意識のなくなったのが庶民です。

今の日本は、メディアも庶民の利益代表ですよ。市民意識を持ちなさいという方向には誘導せず、声高にシステムの不安を言う。責任を負っている人たちがいかに愚劣な人間であるかと、繰り返し繰り返しアナウンスしていく。

システムの信用を失墜させることが結果的にパフォーマンスを上げることだという、信じがたい発想を広く日本人全体が共有しています。こんなことをやっていたら滅びるぞ、と思いますけどね。

**小松** オルテガの書いた『大衆の反逆』そのものですね。システムを生来の権利のように思い、ただ要求するだけ。

**内田** あれ、いい本ですよ。オルテガが『大衆の反逆』を書いたのは1930年で、そのころのスペインは軍閥があったりして、もう少し前近代的な社会でしたから、実際には今ごろ大衆社会が到来したんでないかと、僕は本当にそう思います。

今の日本の社会に一番欠けているのは、公というか市民意識というか、自分たちが社会制度の当事者であるという意識で、学校の中でも、市民意識の教育をしていく必要があると思います。

自分を探求していくっていう恐るべき宗教ですよ。逆だと思えますね。市民教育っていうのは格好つけるってことですよ。

**小松** 我慢して格好の良い自分を演じて見せる。

**内田** そう、一番大事なのは、迷惑をかけたりかけられたりするのが市民社会だということです。私は迷惑をかけてないのだから、迷惑をかけられたくないっていう、そんな人間は無人島に行けってね。迷惑をどうやってうまくかけ、どうやってうまくかけられるかっていうね、かけたりかけられたり、その案配が市民の技術ですからね。自立っていう時にね、自分がどれくらい人

の世話になっていて、逆にどれくらい人の世話ができるかっていう、そのリストを長くしていけるっていうことの方がよほど大事なんです。

**小松** ルーマンは、動機は自分の行動についての後からの言い訳だ、社会に対する説明であって、人間が常に動機に基づいて行動しているのではないというようなことを書いています。

**内田** 内発性の教育っていうのが一つの大きなボタンのかけ違いだと思いますけどね。資本主義的なものと内発性が親和したのは、根本的には先生のおっしゃるような80年代半ばからの消費文化なんです。消費が文化になった。

## 社会で格好良い自分をやせ我慢して演じる。それを教えるのが教育。(小松)

**小松** 入試に合格するのを教えるのは教育じゃないですよ。ね。

**内田** あれは教育じゃないですよ。競争は教育じゃない、セレクションとかは教育じゃない。

**小松** 最近よく読んでいるニクラス・ルーマンというドイツの社会学者がいるんですけど、その人の『社会の教育システム』っていう本で、人格っていうのはペルソナ、仮面であって、社会の中でやっていくための格好つけのもので、ちゃんと格好つけられるようにするのが教育だと、書いてます。

**内田** 全く、おっしゃる通りです。一番ひどかったのが、

つまり消費が自己表現の手段になった。

それまでは人類史に見れば、労働を通じて自己表現していた。仕上げた後に自分が成し遂げたものを振り返って、自分にはこんな能力があって、こんな適性があって、こんな人間だったのかと事後的に確認するものだったんです。

それが、どんな服を着て、どんな家に住んで、どんな食べ物・飲み物で、どんな車に乗って、どんな時計をして、どんな時に旅行に行つてと、お金をどんな風に使うかによって、その人の内発性が表現されるといってシフトしちゃったんですよ。

社会的行動に関してどちらを主体に置くか、全く逆なんですよ。本来は人類史のほとんどの場合で、自分と私というの労働を通じて事後的に確認していたんだけど、70年代終わりから80年代はじめにかけて、消費を通じてし

自分探しか自己決定とか、自分の中に唯一無二の内面があって、それをどうやって表象していくかっていう、その支援をするのが教育だって、とんでもないことを中教審が言ったんですよ。全く逆なんですよ。

市民教育ってのは、ある種のロールプレイングっていうか役割演技をどうやって引き受けるか、仮面をどうやってかぶるかかっていうものなんで、あなたの中に本当の自分があるだなんて、宗教ですよ。なぜ、あんな宗教みたいなものを国策として十数年も展開したのか。今日の教育崩壊に関して言えば、理由はそこと市場原理とに尽きます。本当の

か自己表現できないんだと社会的合意が成立して、消費者であつたら、自分はいったい何が欲しいのかというのを事前に確定しないと身動きできないわけです。

だから自分らしさとか本当の自分みたいなものをあらかじめ決めておかないとお金を使うことができないということとで、内発性のイデオロギー、「本当の自分」が市場から要請されて登場してきたということですよ。

**小松** 「自分を信じて未来へチャレンジしろ」なんて滅茶苦茶なことを言う人いますよね。大抵の人は、自分を信じたって何したって、そんなにうまくいかないですよ。うまくいかなかった時の落とし前の付け方が分からない人は、どうしても不満を持つわけで、それがわがままとなって現れるし、社会の中で落ちていくような場所が失われていくような気がしませんね。

## 「本当の自分がある」消費文化がもたらした恐るべき幻想。(内田)